李白における蜀地方の意義

――「詩跡」論からの再検討――

寺尾　剛

目次

一、序論
二、李白の蜀地方関係の作品について
三、「蜀道難」～伝統的「詩跡」の継承発展
四、成都讃歌としての「上皇西巡南京歌、十首」
五、峨眉山の「詩跡」化～二つの「峨眉山月歌」をめぐって
六、結語

一、序論

蜀地方（現在の四川省にほぼ属す）は、周知の如く、李白が二十代半ばまで過ごした、実質的な故郷とも言うべき土地である。むろん、出身は西域で、五歳頃にこの地に流れ着いたというのが、今日の定説であるが、李白自身、出蜀後も「国、

門遥天外、郷路遠山隔。朝憶相如台、夜夢子雲宅」（「淮南臥病書懐寄蜀中趙徵君蕤」）、「蜀国曾聞子帰鳥、…三春三月憶三巴」（「宣城見杜鵑花」）、「爾去之羅浮、我還憩峨眉」（「江西送友人之羅浮」）と歌っているように、やはり、自らの認識の上では、この蜀地方こそが、彼の故郷であったと見做してよいであろう。

李白と蜀地方との関係についての先行論文としては、松浦友久著『李白伝記論』〔三〕「李白における蜀中生活～客寓意識の源泉として」[1]がある。本書は、まず、李白の蜀中時代の作とほぼ断定できる作品として「訪戴天山道士不遇」「登錦城散花楼」「登峨眉山」「峨眉山月歌」の四詩を挙げ、ついで、出蜀後における蜀に対する言及例を、「詩人の視点との関係」という観点から、次の三種に分類している。

① 李白個人の経歴とは直接に関わらない形で蜀に関する事象が歌われているもの（「上皇西巡南京歌十首」「蜀道難」など）

② 経歴には関わるが故郷としての視点をもたないもの（「上三峡」「観元丹丘坐巫山屏風」など）

③ 蜀を故郷とする視点をもつもの（「上安州裴長史書」「淮南臥病書懐寄蜀中趙徵君蕤」など）

同書の場合、李白の望郷意識がいかなるものであったか、という点が論の中心であるという性格上、②と③に分類される作品が主として検討されている。しかし、視点をやや変えて、李白という詩人の作風、あるいは、彼を代表する作品群、といった観点から見た場合、興味深いことに、①に相当する一連の作品群こそ、より李白らしさが現われ、また、後世への影響も大きいものと考えられるのである。例えば、「蜀道難」は、言うまでもなく彼の代表作であり、その迫力やスケールの大きさは、まさに奔放飄逸たる彼の詩風を如何なく発揮したものと言えよう。あるいは、在蜀期の作品である「訪戴天山道士不遇」「登錦城散花楼」「登峨眉山」などは、彼自身の経歴とは直接に関わらない形で歌われているという点にお

いて、①に類する作品と見做しうるが、これらもまた、やはり彼の代表作の一群に加えられるべき作品と言えるであろう。

先に「視点をやや変えて」と述べたが、具体的に言えば、「詩跡」という視点[2]から、李白の蜀に関する作例を再検討すべきではないか、というのが本稿の主旨である。李白が、蜀という政治的・軍事的にも、あるいは文学的にも極めて重要なこの土地に関して、詩という伝達手段によって、どのような「詩跡」を取り上げ、それらをいかに描写し賛美しているかといった点に焦点を絞ることによって、新たな李白像が現われてくるように思われるのである。

二、李白の蜀地方関係の作品について

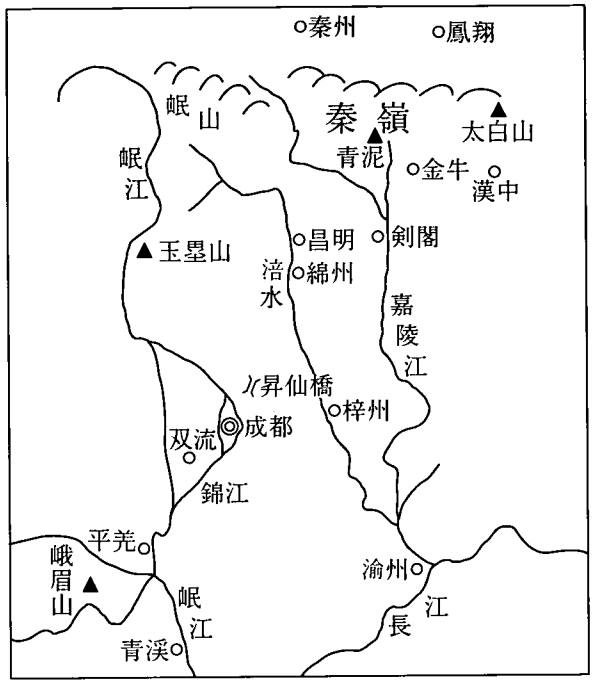
本節では、まず基礎的な作業として、李白が蜀の地について言及している作例を概観してみることにしたい（但し、本稿では、いわゆる「三峡」、及びその関係で歌われることの多い「巴」地方に関しては別稿に譲ることとして、原則として触れないことにする）。

次頁に挙げる〈表〉は、現存する李白詩の、詩題及び詩中に蜀中の地名が登場する作品の一覧である。体例については拙稿「李白における武漢の意義」[3] P.75を参照のこと。制作年代については、安旗主編『李白全集編年注釈』[4]に従っているが、周知のごとく、李白詩の編年については諸説存在しているので、一応の目安といった程度で参照して欲しい（なお、『李白全集編年注釈』は李白の没年を七六三年としているので注意を要する）。

この〈表〉に見えるように、李白が蜀地方に触れている作品は三十八首、李白詩約一千首中の凡そ四％を占めていることになる。これは、李白が二十代半ばまでのおよそ二十年間、人生の約三分の一を過ごした地であることを考慮に入れれば、決して多いとは言えない数字である。杜甫が四年に満たない成都在住期に二百四十首余りの作品を残したことと比較

〈表〉 李白蜀関係詩歌作品

作品番号	作品名	製作地	種別	地名（詩題，詩中）	製作年代
825	訪戴天山道士不遇	綿州	閑適	戴天山	718
694	登錦城散花楼	成都	登覧	錦城(二例)，散花楼(二例)，双流	720
602	酬宇文少府見桃竹書筒		酬答	峨眉	〃
695	登峨眉山	峨眉山	登覧	峨眉〔山〕（二例）	〃
274	峨眉山月歌	江上	歌吟	峨眉山（二例），平羌，清溪	724
743	荆門浮舟望蜀江	荆門	行役	蜀江，錦江	725
414	淮南臥病書懐寄蜀中趙徵君蕤	揚州	寄	蜀，相如台，子雲宅	726
407	贈僧行融	江夏	贈	峨眉	728
206	長相思		楽府	蜀	729
309	読諸葛武侯伝書懐贈長安崔少府叔封昆季	長安	贈	岷蜀	730
571	送友人入蜀	長安	送	蜀（二例）	731
062	蜀道難	長安	楽府	蜀道（四例），峨眉，剣閣，錦城	〃
109	白頭吟其一		楽府	錦水	743
110	白頭吟其一		〃	錦水，蜀	〃
023	古風其二十三		古風	蜀	745
914	題嵩山逸人元丹丘山居	嵩山	題詠	紫雲山	750
423	聞丹丘子於城北山営石門幽居…	東魯	寄	峨眉	751
468	留別曹南群官之江南	曹州	別	峨眉	753
883	聴蜀僧濬弾琴		詠物	蜀（二例），峨眉峰	〃
252	当塗趙炎少府粉図山水歌	当塗	歌吟	峨眉	755
630	答杜秀才五松山見贈	五松山	酬答	錦城	〃
400	贈友人其三	越	贈	蜀	756
264	上皇西巡南京歌其一	潯陽	歌吟	南京，蜀道，剣壁	757
265	〃　二	〃	〃	南京，成都	〃
266	〃　三	〃	〃	南京，華陽	〃
267	〃　四	〃	〃	南京，錦江，玉塁	〃
268	〃　五	〃	〃	南京，錦江，石鏡	〃
269	〃　六	〃	〃	南京（二例），散花楼	〃
270	〃　七	〃	〃	南京，錦水，錦城，星橋，峨眉山	〃
271	〃　八	〃	〃	南京，蜀道，(金牛)，錦城	〃
272	〃　九	〃	〃	南京，錦江	〃
273	〃　十	〃	〃	南京，剣閣，蜀	〃
377	流夜郎半道承恩放還兼欣克復之美書懐示息秀才		贈	剣閣	759
375	経乱離後天恩流夜郎憶旧遊書懐贈江夏韋太守良宰	江夏	贈	峨眉	〃
112	司馬将軍歌	岳陽	楽府	三蜀	〃
275	峨眉山月歌送蜀僧晏入中京	江夏	歌吟	峨眉〔山〕（七例）	760
593	河西送友人之羅浮	豫章	送	峨眉	〃
931	宣城見杜鵑花	宣城	雑詠	蜀国	763



蜀地方の略図

すれば、その差は一層歴然とするであろう。

ただ、その質的な面から言えば、「蜀道難」「訪戴天山道士不遇」「登錦城散花楼」「登峨眉山」「峨眉山月歌」「峨眉山月歌送蜀僧晏入中京」「聴蜀僧濬弾琴」「上皇西巡南京歌十首」「白頭吟二首」「宣城見杜鵑花」等、彼の代表作とも言うべき作品、あるいは彼の作風を語る上で重要度の高い作品、後世への影響の大きい作品等が、少なからず含まれており、決して軽視されるべきものではないと判断されよう。

次に、この表に従って、李白の詩（及び詩題）に現われた蜀地方の地名の用例数を整理してみると、ほぼ次のようになる（一作品中に重複して現われた場合、一首に数える）。

蜀（十五首。うち「蜀道」三首、「蜀江」一首）

華陽（一首。蜀地の古名。但し「宋本」は「徳陽」に作る。そうだとすれば現在の四川省徳陽県）

成都（一首。唐代益州〔蜀郡〕の治所。地名自体は戦国・秦の置いた「成都県」にまで遡ること

ができる）

南京（十首。成都のこと。安史の乱時、玄宗〔当時すでに上皇〕が成都より帰京の後、至徳二載〔七五七年〕十二月十五日、この地を南京と称することとの勅命が発せられたことによる。後述）

錦城（五首。成都の美称。もともと成都の南に位置する、三国・蜀漢が織錦を管理する役所を設置した錦城〔錦官城〕を指していたが、後に成都の別称として用いられるようになった。李白が成都という名称よりも、この「錦城」という美的な名称をより多く用いていることに注意したい）

錦江（四首。成都を流れる岷江〔当時長江の本流と認識されていた〕の一支流。織錦を洗ったことに由来することについては、すでに東晋の『華陽国志』「蜀志」に見える。成都のシンボルの一つ）

錦水（三首。「錦江」のこと）

星橋（一首。七星橋のこと。成都及びその周辺に架かる七橋。『華陽国志』「蜀志」にすでに見える。蜀の治水で著名な秦の李冰が北斗七星に象り建設したという伝承がある。司馬相如出蜀の故事で知られる昇仙橋、諸葛孔明と費禕との別れの場として知られる万里橋などは、詩にしばしば歌われる「詩跡」となっている）

散花楼（二首。成都にある楼の名。楊斉賢注所引の『成都志』に「宣華苑城上有散花楼、隋蜀王秀所立。」とある。また南宋の『方輿勝覧』巻五一にも「散花楼」の条があり、李白の「登錦城散花楼」詩が引用されているが、所在地の説明はない。李白以前に「散花楼」の記述は見られず、李白によって著名になった建築物と考えられる）

相如台（一首。成都の司馬相如旧宅、琴台のことと考えられる。琴台については『初学記』巻二四にも記述がある）

子雲宅（一首。成都の揚雄旧宅。所在地については『太平御覧』巻一八〇、『太平寰宇記』巻七二に記述がある。現在の成都第十三中学校内に位置する）

石鏡（一首。古代蜀国の妃の墓石と伝えられる岩。成都の北角の武担がそれであるという）

峨眉（山）（峰）（十三首。成都の西南約一五〇キロにある。後述）

岷（一首。山名。成都の西から西北にかけての長大な連山。この名はしばしば蜀地の代称・代名詞としても用いられる）

剣閣（三首。山名または道名・関名。成都の東北約二〇〇キロにある。いわゆる蜀の桟道中の難所とされるところ。後述。李白には他に「剣閣銘」という文もある）

剣壁（一首。「剣閣」のこと。張載「剣閣銘」の「是曰剣閣、壁立千仞」を踏まえた表現）

戴天山（一首。李白故居とされる綿州昌明県清廉郷北にある。李白以前は全く無名の山であったが、李白によって著名になる。別名、匡山）

紫雲山（一首。固有名詞であるか否か自体が疑わしいが、現在では戴天山に対面する一山がそれである、というのが通説である）

玉塁（一首。山名。成都の西北約七〇キロ、茂州・彭州の境界線に沿う連山）

双流（一首。成都付近の郫江と流江のこと。左思「蜀都賦」に「帯二江之双流」とある。のち、これに因んで双流郡、双流県等の地名となる。唐代の双流県は成都西南約二〇キロにある。李白の場合、左思のそれを踏まえると考えられる）

平羌（一首。北周の平羌郡及びその一帯を指す。また青衣江のこととする説もある）

清溪（一首。岷江沿いの渡し場。所在地については諸説ある）[5]

以上、李白詩に見える蜀地方の地名（以下「地名」「土地」「地」と言った場合、建築物名・モニュメント名等を含む）を概観してみた。総じて言えることは、「戴天山」「散花楼」等のいくつかの例外を別にすれば、李白は蜀地においては、それほど新しい地名を歌っておらず、むしろ伝統的に過去の歴史書、地志、文学作品等にすでに記載されている地名を多

く用いているという傾向が指摘できるように思われる。

これを「詩跡」の生成発展といった観点から考察してみると、一般に、ある詩人がある土地を歌う場合、その地が、文学的風土としてどのような状況にあるかが問題となる。段階的に言うならば、そのある土地が、①全く、あるいはほとんど無名の状態、②地域的にはある程度著名であっても、全国区には成り得ていない（一般の読書人にまでは知られていない）状態、③すでに全国区には成り得ており、一般の読書人にとっても知識としては共有されていても、その地自体がクローズアップされて、文学作品の独立したテーマに成り得るまでには発展していない状態、④すでにわずかではあるがその地をテーマとする先行の著名な文学作品等がある状態、⑤すでに多くの先行の文学作品があり、「詩跡」として確立している状態、といった様々の段階が状況として存在する。

李白に即して考えるならば、彼は①②の状態にある地を「詩跡」化するのに長じた詩人の一人と言うことができる。例えば、「秋浦」「九華山」「桃花潭」等の安徽省皖南の各地などは、その最たるものと言えよう。また「黄鶴楼」や「敬亭山」「謝朓北楼」なども、それぞれ崔顥の「黄鶴楼」詩があり、謝朓の諸作があるといった意味では④に属するであろうが、当時の状況から考えれば、李白以前にはほとんど紹介されておらず、実質的には②の状態にあったと考えられる。[6] このように、①②（あるいは③）のような状況にあった地が、李白の詩によって広く知られ、後世、しばしば詩文の題材にされる（つまり「詩跡」化される）というケースは極めて多い。

蜀地に関して、この①ないし②に相当するものとして挙げられるのは「戴天山」と「散花楼」であろう。

「戴天山」（別名「匡山」）は「訪戴天山道士不遇」詩の詩題に一例見えるのみであり、詩中の内容も道士を尋ねていく状況が語られているだけで、この山自体を李白がとりたてて賛美しているわけではない。李白の詩によって有名になったと言うより、「著名人」李白が青少年期に訪れたということで、結果的に名を知られるようになったにすぎない。後世ここに「李白読書台遺跡」が造られ、今日多くの観光客が訪れる李白故居の名所の一つになるとは、彼自身思いもよらなかっ

たことであろう。しかし、「詩跡」という点から見れば、これもまた、李白らしい現象の一つであろう。李白遺跡は、全国に無数に存在するが、それは必ずしも彼がその地を賛美した詩を残している場所とは限らない。李白の名声のみで著名になった土地や遺跡も多い。[7] その意味で、この「戴天山」に関して興味深いことは、すでに李白の生前中に、杜甫が「匡山読書処、頭白好帰来」（「不見」）と歌っている点である。杜甫があえてこの「匡山」（「戴天山」）を詩に詠み込んだ理由を考えた場合、一つには、李白がここで読書をしていたことが、当時すでに一般の読書人にも知られていたという可能性が考えられる。また、今一つには、杜甫が、一般読者に対してそのことを紹介しようとした（つまり、「詩跡」化しようと試みた）という可能性もある。むろん、杜甫が、この詩を李白以外の第三者に読まれないことを前提としていたならばこのような仮説は成り立ちにくいが、「詩跡」を生みやすい詩人である李白に関わる地名であるだけに、検討の余地があるように思われる。

また、「散花楼」は、前掲の楊斉賢注所引『成都志』の記述を信じるとすれば、隋の時代の建造物であり、李白が訪れた時には、すでに百年の歴史があることになる（但し『大明一統志』巻六七には「唐建」とある）。しかし管見による限り、李白以前にこの名称は見られない。おそらく地元の人間にとっては周知の建造物であったに違いないが、全国的には知名度は低かったものと想定される。確かに、李白は「上皇西巡南京歌、其六」に「北地雖誇上林苑、南京還有散花楼」と歌い、「散花楼」を、長安屈指の名園たる「上林苑」に匹敵するものとしているが、当時の状況から考えて、それほどの知名度があったとは到底考えられない。むしろ、李白は「上林苑」を引き合いに出すことによって、この「散花楼」を全国的なレベルの「詩跡」に引き上げようと企図したのではないだろうか。意図的であったか否かは別にしても、結果として、この「散花楼」は、李白の「登錦城散花楼」「上皇西巡南京歌、其六」の詩とともに、成都の名所の一つになったことは事実である。以後、南宋の『方輿勝覧』をはじめとして『大明一統志』『大清一統志』といった全国規模の地志にもその名は掲載され、現在に至っても、近年、百花潭公園の畔に再建され、多くの観光客を集めている。

以上、李白の蜀地における①②の典型的なケースを二例ほど見てみた。「詩跡」の生成という意味では、この①②のような状況にある土地を開拓していくことも、文学の発展において大きな価値があり、同時に李白のとりわけ得意とした分野の一つとして注目すべきでもある。

しかしまた、「詩跡」の発展という側面からすれば、④⑤（あるいは過渡的な段階である③）のような状況にある地を歌うという作業もまた、伝統を蓄積し、後世に継承していくといった重要な意味合いを持っている。むろん、詩人にとっては、当然、先行作品と比較されるわけであるから、自己の手腕を明瞭な形で誇示できるチャンスでもあるが、反面、大きなプレッシャーともなるであろう。例えば、その典型的な例として、李白や蘇軾に廬山を歌った名作があるが、この廬山などは六朝時代からすでに「詩跡」として定着しており、彼らの作詩時における重圧感は相当なものであったと想像される。[8]

李白の蜀地における作例を見た場合、前述の如く、すでによく知られた地名が詠み込まれていることが多い。つまり、④⑤の段階、あるいはその段階に至ってなくとも、少なくとも③の段階の状況の地が多く歌われているようである。「蜀」「錦城（成都）」「錦江（錦水）」「蜀道」「剣閣」「峨眉山」といったメジャーな地名から、ややマイナーながら「玉壘」「双流」「石鏡」「相如台（琴台）」「子雲宅（揚雄宅）」「（七）星橋」などといった地名に至るまで、すでに李白以前の文学作品の中に、しばしば題材・素材として登場している。蜀地に関して、李白当時の読書人の参照できた基本的文献として想定されるものを挙げてみても、前漢の揚雄「蜀王本紀」「蜀都賦」、西晋の左思「蜀都賦」、張載「剣閣銘」、陳寿『三国志』（及び裴松子注）、東晋の常璩『華陽国志』、北魏の酈道元『水経注』等といった名著・名篇が容易に思い付く（むろん蜀には限定されないが『文選』『芸文類聚』『初学記』等の総集・類書も想定される）。李白の用いる蜀中の地名の多くは、これら名立たる作品にすでに記載されているのである。従って、李白の詠蜀詩研究を進めるに当って、李白がいか

にこれらの地名を用い、その地を「詩跡」として発展させていっているかが、重要な課題となってくるように思われる。

次節以下、こういった問題を考える上で象徴的な作品、即ち「蜀道難」「上皇西巡南京歌、十首」及び二つの「峨眉山月歌」を中心に検討して行きたいと思う。これらの作品群は、土地讃歌の詩、換言すれば、「詩跡」謳歌の詩として再検討することによって、新たな意味付けが可能となってくるように思われる。そしてまた、李白の歌う土地がなにゆえ「詩跡」化されやすいのか、土地を歌う李白の詩がなにゆえその土地々々の人々に愛唱されるのかという、「詩跡」研究における重要な懸案を検討するする上でも、これらの作品群は、極めて示唆に富むものと考えられるのである。

三、「蜀道難」～伝統的「詩跡」の継承発展

まず、「蜀道難」から検討してみたい。この作品については古来から多くの議論がなされているが、最も根本的な問題であるはずの、この詩の主軸・キーワードたる「蜀道」という地の持つ文学的意味合いに関する考察、換言すれば、その土地の持つイメージ・意義等からのアプローチ、即ち「詩跡」としての視点からの検討・議論が、十分になされていないように思われる。李白がこの詩を制作しようとした、そもそもの主要動機（ライトモチーフ）は、何より、この「蜀道」の持つ「詩跡」としての文学的素材の豊かさではなかったろうか。そしてまた、読者の立場から言えば、この作品に横溢する、李白の「蜀道」という地に対する異様ともいえる激しい情熱こそが、この詩の魅力であり、人気を集める所以であろう。古来から云々されている「寓意」の有無やその対象といった問題は[9]、この作品自体の評価を揺るがすものではなく、むしろ二義的な問題に過ぎないように思われる。この作品は、寓意性を抜きにして、単純に土地讃歌の詩・「詩跡」謳歌の詩として読んでも、いささかの遜色もないであろう。

蜀道難

噫吁嚱、危乎高哉、蜀道之難、難於上青天。
蚕叢及魚鳧、開国何茫然。
爾来四万八千歳、不与秦塞通人烟。
西当太白有鳥道、可以横絶峨眉巔。
地崩山摧壮士死、然後天梯石桟相鈎連。
上有六龍回日之高標、下有衝波逆折之回川。
黄鶴之飛尚不得過、猿猱欲度愁攀援。
青泥何盤盤、百歩九折縈巖巒。
捫参歴井仰脅息、以手撫膺坐長嘆。
問君西遊何時還、畏途巉巖不可攀。
但見飛鳥号古木、雄飛雌従繞林間。
又聞子帰啼夜月愁空山。
蜀道之難、難於上青天、使人聴此凋朱顔。
連峰去天不盈尺、枯松倒挂倚絶壁。
飛湍瀑流争喧豗、砕崖転石万壑雷。
其険也若此、嗟爾遠道之人胡為乎来哉。
剣閣崢嶸而崔嵬。
一夫当関、万夫莫開。

所守或匪親、化為狼与豺。
朝避猛虎、夕避長蛇。
磨牙吮血、殺人如麻。
錦城雖云楽、不如早還家。
蜀道之難、難於上青天、側身西望長咨嗟。

この作品は、「詩跡」としての「蜀道」の文学的・歴史的イメージの伝統の集大成として読むことができる。以下、その点に着目して検討してみることにしたい。

李白は、まずこの地の歴史から説き起こす。その場合、秦の支配下に置かれ、漢化する以前の、古代蜀国（いわゆる「古蜀国」）から説き始めることによって、その歴史的なスケールの大きさを強調している。揚雄「蜀王本紀」によれば、蚕叢から開明まで「三万四千歳」とあるが、李白は得意の誇張表現によって「四万八千歳」にまで引き伸ばしている。蜀国史を語る場合、この蚕叢・魚鳧ら、いわゆる蜀の五王の時代を最古の時代として語るのが、揚雄「蜀王本紀」や常璩『華陽国志』等の記述から見ても、歴史書・地志類の常套と判断されるが、ここで注目すべきことは、李白が、詩という文学作品においても、これらの時代に着目した点である。蜀を歌う詩歌作品は古来から多くあるが、蚕叢・魚鳧に触れる詩は、李白以前にはほとんど皆無であり、むろん過去の「蜀道難」「蜀国弦」といった楽府作品の諸作にも登場していないのである。[10] ある土地を歌う場合、その土地が長い歴史を持っていれば、その点を強調することによって、その地の人々を喜ばせることができる。まさに李白の着眼の鋭さであろう。また、古代蜀国の故事としては、この他、杜宇（望帝）と子帰鳥にまつわる伝承、蜀王に仕える五丁（五人の壮士）とその蜀道開鑿をめぐる伝承などが、広く知られている。これらは揚雄「蜀王本紀」・常璩『華陽国志』・酈道元『水経注』等の歴史書・地志の類にも記載され、また、多くの文学作品にも

頻繁に登場する。そのような著名な故事も、李白は詩中に詠み込むことを忘れていない。しかも、「又聞子帰啼夜月愁空山」、あるいは「地崩山摧壮士死、然後天梯石桟相鈎連」といったように、極めて巧みな用い方によってである。

歴史もさることながら、この地の何よりの特色は、その険しさにあろう。その点に関しても、文学作品を始めとして、古来からさまざまな文献に記述がある。前掲の「蜀王本紀」『華陽国志』『水経注』はもちろんのこと、左思の「蜀都賦」、張載の「剣閣銘」、簡文帝・劉孝威・陰鏗・張文琮の「蜀道難」といった文学作品にいたるまで、蜀道が天険の要害であることは繰り返し語られている。それにちなむエピソードも、諸葛亮の桟道を始めとして数多くある。著名な例としては、『漢書』巻七六「王尊伝」の故事がある。これは、先に王陽という人物が益州刺史として赴任する際、蜀道の九折阪（坂）に至った時、「奉先人遺体、奈何数乗此険。」と嘆じて、引き返してしまったが、後、王尊は、益州刺史としてこの九折阪にさしかかった際、吏に「此非王陽所畏道邪。」と尋ね、吏がそうだと答えると、御者を叱して「駆之。王陽為孝子、王尊為忠臣。」と言ったというものである。これなどは、陰鏗の「蜀道難」にも引かれている。

李白の「蜀道難」は、この「蜀道」イコール「天険」というイメージを核としする、過去の多くの作品に見られる伝統的イメージを、見事に消化し、さらに発展させている。例えば、「西当太白有鳥道、可以横絶峨眉巔」という表現。「太白（山）」「峨眉（山）」は、『水経注』にも見られる地名であるが、李白は、四川盆地が、四方山岳に囲まれていることを強調するに当たって、極めてスケールの大きな見方をしている。普通、蜀の天険を言う場合、金牛駅～剣閣～成都のルート、即ち金牛道中心に語られるのが常套であるが、李白は、この規模をはるかに拡大し、北は秦嶺山脈の主峰・太白山、南は成都よりはるか南に位置する峨眉山をも範疇に入れることによって、その雄大さを誇張的に表現している。また、李白以前から名高い「詩跡」である「剣閣」の天険については、左思「蜀都賦」の「一人守隘、万夫莫向」、張載「剣閣銘」の「一人荷戟、万夫趑趄。形勝之地、匪親勿居」を踏まえつつ、「剣閣崢嶸而崔嵬。一夫当関、万夫莫開。所守或匪親、化為狼与豺」と、一層の強調を行なっている。この李白の表現について、一つ補足するならば、「剣閣」を彼が「関」と称して

いる点が注目される。李白以前において、「剣閣」を「関」とする文献はほとんど見られない。厳耕望『唐代交通図考』巻四第二三篇「金牛成都駅道」は、「剣門関」の条に「此地帯雖久以険要名、但似未置関。『隋史』、此処亦無関官。『唐六典』六「刑部司門郎中条」、上中下等関二十六、亦無此関名。然杜甫「剣門」云：「一夫怒臨関、百万未可傍。」李白「蜀道難」：「剣閣峥嶸而崔嵬、一夫当関万夫莫開。」則天宝末当已置関矣。」（傍点寺尾）と述べている。作品の成立年代から言えば、むろん李白の「蜀道難」は、杜甫の「剣門」より早い。厳耕望『唐代交通図考』の推理が正しく、ここに関が設けられたのが天宝以降だとすれば、李白は、最も早くその情報を天下に紹介した人物の一人と言うことになろう。これが彼の意図的な行為であるか否かは別にしても、李白は旧来の「詩跡」に新たな一頁を加えたことになる。

この他、李白が「蜀道」の伝統を、継承発展させている点を挙げてみると、「不与秦塞通人烟」という表現は、「秦」地（あるいは中原）との関係で「蜀」「蜀道」を捉えるという、古代蜀国と秦国との対立以来の伝統的な通概念を踏襲し、「天梯石桟」は諸葛亮等の蜀の桟道を踏まえ、「上有六龍回日之高標」は、左思「蜀都賦」の「羲和仮道於峻岐、陽烏回翼乎高標」を踏まえている。また、「青泥（嶺）」も、すでに『水経注』巻二七に「青泥西山」と見え、『事類賦注』巻七所引『郡国志』に「興州青泥嶺上多雲雨、屡成泥淖。」[12]とある。ただ、詩に関しては、李白以前にはほとんど登場せず、彼以後、杜甫、元稹、李嘉佑等、用例は増えていく。あるいは、李白のこの「蜀道難」の名声が高まるにつれて「詩跡」化されていった地名であるのかもしれない。また、「百歩九折縈巖巒」の「九折」は、ここではむろん地名ではないが、前述の『漢書』「王尊伝」の「九折阪（坂）」が、さりげなく踏まえられていることは、明らかである。「九折阪（坂）」「九折路」は、劉孝威「蜀道難」、盧思道「蜀国弦」、陰鏗「蜀道難」等にも見え、蜀道中、最も人気の高い「詩跡」の一つでもある。また、「捫参歴井仰脅息」は、「参」＝「蜀」、「井」＝「秦」という星座の分野説を踏まえたものであるが、その知識を有せずとも読めるという意味では、極めて巧みな表現であると言えよう。

この李白の「蜀道難」の地名や典故の用い方の傾向を総じて言うならば、仮にその知識が読者になかったとしても、そ

のまま読み通してしまえるほど、それらの用い方が自然であり、作品に溶け込んでいる、ということである。例えば、すでに挙げた子帰鳥伝説を暗示する「又聞子帰啼夜月愁空山」といった表現、「地崩山摧壮士死、然後天梯石桟相鈎連」といった五丁説話の描き方、また、「百歩九折縈巖巒」「上有六龍回日之高標」といった、九折坂故事や左思「蜀都賦」の表現を踏まえた表現等々、いずれも過去の蜀関係の文献や伝統イメージを継承しつつ、なおかつ「用典不着痕迹、自然流暢」（周勲初主編『唐詩大辞典』〔江蘇古籍出版社、一九九〇年〕「蜀道難」の項の郁賢皓の評）といった印象を読者に与える。このように多数の伝統的地名・故事を用いながら、読者にその煩雑さをほとんど感じさせないのは、彼の詩人としての力量もさることながら、その文献・伝統の消化能力の高さ、「詩跡」論に即して言うならば、土地描写というものに対する適応性の高さ、熟練度の高さを物語るものといえよう。

この李白の「蜀道難」は、周知の如く、すでに唐代から彼の代表作の一つとして広く知れわたっていた。[13] それは、同時に、彼によって「蜀道」の名声も、唐代以降、一層高まったことを意味する。今日に至るまで、「蜀道」と言えば、必ずと言ってよいほど李白の「蜀道難」が引き合いに出され賛美される。李光偉選注『剣門詩歌選注』[14]も「歴代詩人以「蜀道難」為題的詩和詠嘆蜀道之難的詩、挙不勝挙、而以李白「蜀道難」影響最大。」と指摘している。李白「蜀道難」が愛唱される理由は、「蜀道之難、難於上青天」を始めとする、数々のインパクトに富む雄大な誇張表現、奇抜な発想法もさることながら、李白が、この作品を通して、「詩跡」としての「蜀道」の伝統的なイメージを総合的に集約して、更に発展させた点に、その大きな要因が求められるように思われるのである。

四、成都讃歌としての「上皇西巡南京歌、十首」

「蜀道難」に続いて「上皇西巡南京歌、十首」を見てみることにしたい。

上皇西巡南京歌、其一

胡塵軽払建章台、聖主西巡蜀道来。
劍壁門高五千尺、石為楼閣九天開。

其二

九天開出一成都、万戸千門入画図。
草樹雲山如錦繡、秦川得及此間無。

其三

華陽春似新豊、行入新都若旧宮。
柳色未饒秦地緑、花光不減上陽紅。

其四

誰道君王行路難、六龍西幸万人歓。
地転錦江成渭水、天回玉塁作長安。

其五

万国同風共一時、錦江何謝曲江池。
石鏡更明天上月、後宮親得照娥眉。

其六

濯錦清江万里流、雲帆龍舸下揚州。
北地雖誇上林苑、南京還有散花楼。

其七

錦水東流繞錦城、星橋北挂象天星。
四海此中朝聖主、峨眉山上列仙庭。

其八

秦開蜀道置金牛、漢水元通星漢流。
天子一行遺聖跡、錦城長作帝王州。

其九

水淥天青不起塵、風光和暖勝三秦。
万国烟花随玉輦、西来添作錦江春。

其十

剣閣重関蜀北門、上皇帰馬若雲屯。
少帝長安開紫極、双懸日月照乾坤。

天宝十五載（七五六年）六月、玄宗皇帝は、安禄山軍の進攻によって、長安を脱出し、七月に至って成都（蜀郡）に到着した。以後、位を継いだ粛宗の長安奪回に応じて、至徳二載（七五七年）十二月四日、再び長安に帰還するまでの凡そ十五ヵ月間、玄宗は都を留守にして、成都を拠点に反乱を回避していたわけである。詩題の「上皇西巡」とは、この史実を言う。また、「南京」とは、玄宗長安帰還の直後、十二月十五日、「蜀郡（成都）を以て南京と為し、鳳翔郡を西京と為し、西京（長安）を中京と為す」（『新唐書』「粛宗本紀」）との勅が下り、成都が「南京」と称され、府に昇格したことを指す。ちなみに三年後の上元元年（七六〇年）には、「京」と呼ぶことは取り消されている。『新唐書』「地理志」に「成都府蜀郡…至徳二載曰南京、為府、上元元年罷京。」とある。従って、李白のこの連作は、詩題・詩中（「其六」）に「南京」とあり、また「其十」にも玄宗の長安帰還を暗示する表現があることからも明らかなように、至徳二載十二月から上元元年に至るまでの凡そ三年の間に制作されたものと、ほぼ確定できるわけである。なお、王琦、詹鍈、安旗等、多くの李白年譜が、至徳二載の作と限定しているが、いずれも決定的な論拠は示されていない。

この連作を通観して、まず気付くことは、その詠み込まれている地名の多さである。蜀関係だけでも、「蜀道」（二例）「剣壁（「剣閣」を指す）」「成都」「華陽（『宋本』は「徳陽」に作る）」「錦江」（三例）「玉壘」「石鏡」「南京」「散花楼」「錦水」「錦城」（二例）「星橋」「峨眉山」「剣閣」「蜀」等、合計十九例、さらに「濯錦清江」「金牛」といった表現や語彙も、錦江・金牛道という地名を意識したものとして加えるならば二十一例に及ぶことになる。また長安・秦地に関するものでは、「建章台」「秦川」「新豊」「秦地」「渭水」「長安」（二例）「曲江池」「上林苑」「三秦」と、合計十例。その他の地名としては「揚州」「漢水」、及び洛陽の「上陽（宮）」（ただし『宋本』は「上林」に作る）の三例。短詩型たる七言絶句のわずか十首中に、総計三十四例、一首あたりの平均で言うならば、凡そ三個から四個もの地名が詠み込まれていることになる。この瞠目すべき事実について、過去、ほとんど何ら議論もなされてきていないということは、李白研究における重大な欠落と言うべきであろう。「詩跡」論に立つならば、まさしく「詩跡」の詩人たる李白の本領が発揮されている

作品として、再検討を要する重要な作品群と見做すことができよう。

過去において、この作品がそれほど高く評価されなかった最大の理由は、玄宗の長安出奔という、唐王朝にとって屈辱的な史実に関わる作品であるからであろう。過去の論者も、この作品の評価に関しては、必ずと言ってよいほど、亡国の危機を招いた玄宗の失策に対する李白の姿勢・態度に関心が集中している。現代の薛天緯氏の一連の研究[15]に詳細は譲るが、翁方綱『石洲詩話』の如く「西巡之歌、殊与風雅之旨不類。安史之乱、豈得云軽払辺塵。」と手厳しく批判するものから、蕭士贇の如く「成事不説、遂事不諫」の原則を持ち出し弁護するもの、あるいは唐汝詢『唐詩解』の如く「太白雖為尊者諱、然亡国之恥正在言表。」と言い、一見玄宗を賛美しているようだが、実は、その賛美こそが諷刺となっている（張才良主編『李白詩四百首』所収の薛天緯「上皇西巡南京歌十首」の解説の言葉を借りれば「反調正唱的諷刺手法」）といった方向で解釈するもの等々が、その例である。李白を批判するにせよ弁護するにせよ、玄宗と安史の乱を離れての議論は、ほとんどなされていないというのが実態である。

むろん、この作品は、玄宗の成都巡行という史実に取材した作品であることにはまちがいない。十首全体の構成を見ても、玄宗西巡の始まりから終わりまでが語られている。第一首目はその往路となった蜀道の剣閣の通過、第二首目は成都入城、最後の第十首目は成都からの帰還、というように、テーマ的に連作としての一貫性・統一性が保たれている。しかし、李白がなにゆえこの連作を制作したのかという、制作動機の問題を考えた場合、果たして玄宗が彼の関心の中核であったのか否かについては、なお疑問が残るのである。玄宗讃歌であるならば、なにゆえ本来最も祝うべき、唐朝軍の勝利とそれに継ぐ長安帰還を中心に据えなかったのか（第十首目に簡単に触れられるのみ）、という疑問もさることながら、この連作の個々の作品を見てみた場合、「其二」「其三」「其四」「其五」「其六」「其九」等、全体の半数以上（六首）を占める作品において、他の地（特に長安地区）との比較を通じての成都（及び蜀地）の賛美に重点が置かれている、という事実をどのように解釈すればよいのか、という疑問が存在するわけである。

倒えば、「其二」は「草樹雲山錦繡の如し、秦川此の間に及び得るや無や」と、成都の自然（「草樹雲山」）の美しさが秦川（長安地区）のそれに勝ることを歌う。「其三」は「華陽の陽春新豊に似たり、行きて新都に入らば旧宮の若し。柳色未だ秦地の緑より饒からざるも、花光は上陽の紅に減ぜず」と、一首全体が、蜀地（「華陽」「新都」）と秦地・洛陽（「新豊」「旧宮」「秦地」「上陽」）との比較に費やされ、やはり蜀地の優秀性が強調されている。「其四」は「地は錦江を転じて渭水と成し、天は玉塁を回らして長安と作す」と、「錦江」「玉塁（山）」が秦地の「渭水」「長安」に比擬されている。「其五」は「錦江何ぞ謝せん曲江池」と、「錦江」が長安城最大の遊覧地である「曲江池」に優るとも劣らないことを歌う。「其六」は「北地上林苑を誇ると雖も、南京還た有り散花楼」と、成都の散花楼がかつての漢の御苑であった「上林苑」に匹敵すると歌う。「其九」も「水渌（きよ）天青く塵を起さず、風光和暖にして三秦に勝る」と、蜀地の山水の清らかさ、気候の温暖さが、秦地のそれに優ることを歌っている。

拙論「李白における越地方の意義〜李白の美意識の源流をめぐって」[16]においてすでに指摘しておいたが、李白には、ある土地を賛美する場合、他の地（著名な地や李白が自認する優れた地）を引き合いに出し、それとの比較を通じて賛美する、といった手法上の一連の傾向がある（山水美に関してはとりわけ越地方が引き合いに出される）。李白はこの手法を、「上皇西巡南京歌」においては、成都及び蜀地に応用しているわけである。

この連作における李白の成都及び蜀地の賛美は極端にまで徹底している。「其二」「其三」「其四」「其五」「其六」「其九」等のように、他の地（特に秦地）を引き合いに出して賛美するほか、「其一」は「剣壁門高きこと五千尺、石は楼閣を為し九天に開く」というように、李白得意の誇張表現によって剣閣を讃え、「其七」は「（七）星橋」「峨眉山」を登場させている。特に「峨眉山」は、史実による限り玄宗は訪れてはいない。蜀地を代表とする名勝という理由から、あえて登場させたのであろう。ちなみに白居易も「長恨歌」において「峨嵋山下少人行」と、峨眉山を登場させているが、あるいは李白のこの作品を踏まえたのかもしれない。また「其八」においては「錦城長く帝王の州と作る」とまで、成都の南京昇

格を賛美している。

以上のように、この詩は、玄宗に対する李白の態度に関する毀誉褒貶や詩の深層部分における諷諫性の有無といった議論を別にして、表現されている内容をそのままたどって読んでいく限り、まさしく成都讃歌の詩であり、蜀地讃歌の詩であると言わざるをえないのである。玄宗が訪れたことによって、箔が付き、なおかつ、都の一つにまで昇格されたことを、「六龍西幸して万人歓ぶ」（「其四」）と歌うように、成都の民衆とともに喜びを以て祝福している詩として読んでも、何ら矛盾は生じないであろう。主役は玄宗でなく、成都あるいは蜀地であるとさえ考えることが可能なのである。班固「両都賦」、左思「三都賦」以来の、「土地自慢」「お国自慢」の文学の伝統が、この作品にも継承されていると考えたい。この連作は、あるいは、李白を含めて蜀の地を愛する読者のために書かれたものではないだろうか。仮に玄宗を読者として想定していたとしても、それは成都及び蜀地を一層著名なものとしてくれたことに対する謝辞として読むことが可能であろう（むろん、この連作は、蜀に縁の薄い読者に対しても、十分に蜀地の紹介・宣伝としての役割をも果たしている）。

「土地を謳歌・賛美したいという欲求」という意味において、この「上皇西巡南京歌、十首」は、前述の「蜀道難」と同根のパトスを有している作品群と言える。このような観点から再評価するならば、この連作は、まさしくトポフィリア（土地愛着）の文学であり、「詩跡」生成を得意とする李白ならではの作品群として位置付けることができるのではないだろうか。

五、峨眉山の「詩跡」化～二つの「峨眉山月歌」をめぐって

まず李白の峨眉山を主題とする作品を三首挙げてみる。

登峨眉山

蜀国多仙山、峨眉邈難匹。
周流試登覧、絶怪安可悉。
青冥倚天開、彩錯疑画出。
冷然紫霞賞、果得錦囊術。
雲間吟瓊簫、石上弄宝瑟。
平生有微尚、歓笑自此畢。
烟容如在顔、塵累忽相失。
儻逢騎羊子、携手凌白日。

峨眉山月歌

峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流。
夜発清溪向三峡、思君不見下渝州。

峨眉山月歌送蜀僧晏入中京

我在巴東三峡時、西看明月憶峨眉。
月出峨眉照滄海、与人万里長相随。
黄鶴楼前月華白、此中忽見峨眉客。
峨眉山月還送君、風吹西到長安陌。

長安大道横九天、峨眉山月照秦川。
黄金師子乗高座、白玉麈尾談重玄。
我似浮雲滞呉越、君逢聖主遊丹闕。
一振高名満帝都、帰時還弄峨眉月。

すでに第二節で見てきたように、峨眉山は李白の現存作品中、総計十三首もの作品に登場している。李白以前に、これほど多く峨眉山を詩に詠み込んだ詩人は存在しない。さらに言えば、上掲の「登峨眉山」「峨眉山月歌」「峨眉山月歌送蜀僧晏入中京」のように、峨眉山を詩題に打ち出し、一首全体の主題・主役とした作品も、現存作品を見る限り、李白以前には存在しない。後世の評価という意味でも、例えば「峨眉山月歌」などは、李白詩中は言うに及ばず、唐代を代表する絶句として、今日に至るまで極めて高い評価を得ている。また、「登峨眉山」冒頭の「蜀国仙山多しといへど、峨眉邈として匹し難し」などは、現在でも峨眉山関係の案内書等には必ずと言ってよいほど引かれている文句である。このように、質量いずれの面から見ても、彼が峨眉山の「詩跡」化に最も貢献した詩人の一人であることは疑い得ない。

確かに峨眉山は、李白以前からも蜀中の名山として、かなり名の知られた山岳であったと考えられる。伝・劉向『列仙伝』「葛由」（周の成王の頃、木羊造りの名人である羌の葛由が羊に騎し峨眉山南西の綏山に去っていったという伝説）、左思「蜀都賦」、常璩『華陽国志』、酈道元『水経注』に見られるほか、唐代に入ってからも、太宗皇帝の「秋日、其二」（『全唐詩』巻一）に「還似成都望、直見峨眉前」といった用例が見られる。また、李白以前に最も峨眉山の用例の多い詩人としては、蜀出身の陳子昂が挙げられる。「感遇詩、其三十三」に「飛飛騎羊子、胡乃在峨眉」、「同、其三十六」に「浩然坐何慕、吾蜀有峨眉」、「同曹参軍之問趙六贈盧陳二子之作」に「始憶携手期、雲台与峨眉」、「登薊丘楼送賈兵曹入都」に「峨眉杳如夢、仙子曷由尋」（以上『全唐詩』巻八三）、「贈別冀侍御崔司議」（『全唐詩』巻八四）に「白雲峨眉上、歳

晩来相尋」とあり、すべて五首の作品に登場している。しかも「飛飛騎羊子、胡乃在峨眉」、「始憶携手期」のように、李白が「登峨眉山」末尾二句（「儻逢騎羊子、携手凌白日」）において真似たものと思われる表現も存在する。このように、峨眉山の「詩跡」化において、陳子昂の存在も極めて大きいと言わねばならない。しかし、李白のように峨眉山を詩題とし、主役とするような作品は現存していない。何より、後世への影響という意味では、「峨眉山月歌」等の作品には遠く及ばないであろう。

李白の峨眉山への愛着という意味で、興味を引くことと言えば、彼がこの山をしばしば故郷の代名詞として、あるいは最終的に帰隠すべきところとして描いている点である。例えば「代寿山答孟少府移文書」は、安陸時代の李白が、孟少府という人物に対して、寿山に代わるという形で自己紹介をした文であるが、その中で、自ら「近者、逸人李白、自峨眉而来。」と述べている。また、詩においても「我在巴東三峡時、西看明月憶峨眉」（「峨眉山月歌送蜀僧晏入中京」）、「知恋峨眉去、弄景偶騎羊」（「留別曹南群官之江南」）、「爾去之羅浮、我還憩峨眉」（「江西送友人之羅浮」）などがその例として挙げられる。李白の蜀中における故居が綿州（昌明県清廉郷）にあったことは、今日ほぼ定説となっているが、現存作品を見る限り、李白自身の言葉でそれが語られたことはない。李白の故居に対する望郷意識の希薄さの理由については、すでに松浦友久著「李白における蜀中生活」（前掲）に詳細な考察があるのでそれに譲るが、少なくとも李白が峨眉山に対しては、特殊な思い入れがあったことだけは、その用例数の多さ、あるいは以上のような李白自身の発言から推測してみても確かなようである。

その峨眉山愛着のそもそもの根元的な理由としては、出蜀前の若き日の作品である「登峨眉山」の内容からも伺い知ることができるように、やはり李白の信奉する道教的な「仙山」であるということが第一に挙げられるであろう（むろん仏教の聖山でもあるが、李白は仏教に対しても好意的である。峨眉山関係の詩にも「贈僧行融」「聴蜀僧濬弾琴」等しばしば蜀僧が登場している）。ただ、宗教家としてでなく、詩人としての李白という側面で考えた場合、若き日の「峨眉山月歌」

の成功が、彼に詩人としての自信を与えるとともに、それに応じて峨眉山への愛着をも強めることになったと仮定できないであろうか。

「峨眉山月歌」は、そこに詠み込まれている地理的なルートを李白が実際にたどったものとするならば、二十代半ばの出蜀の際以外に書かれたと考えるのはほとんど不可能に近い。従って、今日ほとんど全ての李白年譜は出蜀時のものとしている。一方、この作品の受容史を考えた場合、李白在世中（あるいは唐代全般）においてどの程度普及し、どのような評価がなされていたかは不明ではある。しかし、蘇軾が「峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流。謫仙此詩誰解道、請君見月時登楼」（「送張嘉州」、『蘇軾詩集』巻三二）と歌い、また陸游が「峨嵋月入平羌水、嘆息吾行俄至此。謫仙一去五百年、至今醉魂呼不起」（「凌雲醉帰作」、『剣南詩稿』巻四）、「依依向我不忍別、誰似峨嵋半輪月。月窺船窓挂凄冷、欲到渝州酒初醒」（「舟中対月」、同、巻十）と歌うなど、すでに宋代では広く人口に膾炙していた作品である。李白の詩名の高さから考えて、すでに在世中から知られていた可能性は極めて高いであろう。仮に知られていたなかったとしても、李白自身にとって、会心の作であったに違いない。

そのことを伺い知ることのできる作品が「峨眉山月歌送蜀僧晏入中京」である。この作品は詩題に「中京」とあることから、制作年代がかなり絞られる。つまり、長安が「中京」と称されたのは、前節にも触れたように至徳二載（七五七年）十二月からで、また、それが取り消されたのは上元二年（七六一年）であり、その間に作られたことは確実である。ここで重要なことは、この「峨眉山月歌送蜀僧晏入中京」が、晩年の作であるということ、即ち「峨眉山月歌」から三十年余りも後に書かれているということである。また、この詩が前作を踏まえていることは、①同じく「峨眉山」と「月」が歌われているということ、②冒頭の「我巴東の三峡に在りし時、西のかた明月を看て峨眉を憶ふ」と歌い、あたかも前作の「夜清溪を発して三峡に向ふ、君を思へど見えず渝州に下る」に続く続編的なタッチで書かれていること、③作詩の手法として、両者とも多くの地名を詠み込んでいること――等々の理由から、ほぼ間違いないものと思われる。つまり、李白

は三十年の歳月を経て、自らの作品をいわば「典故」とした作品をもう一首制作したことになるのである。

これは李白自身の前作に対する愛着と自信を意味すると同時に、「詩跡」論の観点からすれば、李白が意識的にせよ無意識的にせよ、「峨眉山」イコール「月」というイメージ造りを繰り返し行なったことによって、峨眉山独自のイメージに新たな一頁を加えたことをも意味する。その成果は、以後の多くの峨眉山詩を見れば明らかである。後世、峨眉山と言えば「月」というイメージは完全に定着している。例えば、前掲の蘇軾、陸游はむろんのこと、陳述舟『峨眉山詩選注』[17]を参照すると、宋の姚孳、明の曹学佺、清の王士禎などの作例が挙げられている。いずれも明らかに李白の「峨眉山月歌」が踏まえられつつ峨眉山と月が歌われている。

「峨眉山月歌」や「峨眉山月歌送蜀僧晏入中京」が優れた作品とされる理由の一つとして、地名が頻用されているにも関わらず、読者にその煩雑さを感じさせず、逆に、個々の地名が、一首全体にわたる流れる月のイメージに連動せられて、むしろ活性化しているという点が挙げられよう。すでに、「峨眉山月歌」については王世貞『芸苑巵言』（巻四）に著名な評がある。「此是太白佳境。然二十八字中、有峨眉山、平羌江、清溪、三峡、渝州。使後人為之、不勝痕跡矣。益見此老鎚錘之妙。」と。この五つの土地が、月を見つめつつ旅する詩人の動きとともに、流れるような美しいイメージで詠み込まれているわけである。また、「峨眉山月歌送蜀僧晏入中京」も、厳滄浪『李太白集』に「是歌須看其主伴変幻。題立峨眉作主、而以巴東、三峡、滄海、黄鶴楼、長安陌与秦川、呉越伴之、帝都又是主中主…。」といった指摘がある。多くの地名を詠み込み、さらに主役である「峨眉」及び「月」の語を各六回づつ使用している。この前後二つの「峨眉山月歌」は、土地を描き込むことを得意とする李白の、まさに面目躍如たるおもむきがある。そして同時に、なにより重要なことは、李白が自らの力を傾注して「峨眉山」と「月」とを結びつけ、そのことによって「峨眉山」を一層美化しようと努めているという事実である。

周知のように、峨眉山は一年中のほとんどが曇天ないし雨天である。その合間に罕に見られるさやかな月の光は、他の

土地にくらべて、一層貴重であり、詩人たちを魅了する。そこに着眼した李白の見識眼は非常に鋭いものと言わなければなるまい。ある土地を「詩跡」として成立させ継承させるには、その土地の特色を印象的にクローズアップして強調することが重要である。李白はその秘訣を生来的に会得している、優れた「詩跡」詩人として規定することができるのではないだろうか。

六、結語

以上、「蜀道難」「上皇西巡南京歌、十首」及び二首の「峨眉山月歌」を主に取り上げて、これらの作品を「詩跡」という観点から検討してみた。

要点をまとめると、以下のようになる。

①「蜀道難」は、李白がすでに「詩跡」として定着している「蜀道」に対して、その伝統を集約的に活用し、さらに誇張表現などを用いて印象的に描くことによって、その地を一層著名にし、不朽のものとした作品であるということ

②「上皇西巡南京歌、十首」は、玄宗賛美というより、成都及び蜀地の讃歌と考えたほうが妥当性が高く、いわばトポフィリアの文学として再評価すべきではないかということ

③李白は峨眉山の「詩跡」化に最も貢献した詩人の一人であること。また、二つの「峨眉山月歌」は、峨眉山に新たな詩的イメージを付与し、後世に絶大な影響を与えたということ

これらの作品を通じて言えることは、いずれもその根底に、土地讃歌への希求とも言うべき李白の土地そのものに対する激しい愛着、パトスといったものが感じられるということである。さらに付け足すならば、その作品の多くが後世の文学に継承され、そこに詠まれた土地も李白の名とともに「詩跡」化されていくという事実も忘れてはならないであろう。

むろん蜀の「詩跡」化については、量的には、杜甫に遠く及ばないであろう。とりわけ成都に関して、例えば「草堂」「浣花溪」「石笋街」「碧鶏坊」「武侯祠」「琴台」「万里橋」「石鏡」などは、杜甫の詩によって著名になった地と言っても過言ではない。また、「春夜喜雨」の「暁看紅湿処、花重錦官城」という句は、現在でも成都宣伝のキャッチフレーズとしてしばしば用いられている。しかし量的には勝らぬまでも、李白の蜀地に与えた影響も極めて大きい。「蜀道難」や「峨眉山月歌」は知名度の極めて高い作品であるし、李白遺跡も、江油の李白紀念館、清廉郷の李白故居、成都の散花楼、剣閣の「蜀道難」碑、峨眉山万年寺の琴蛙池（李白「聴蜀僧濬弾琴」に因む）など、決して少なくはない。

以上のように、「蜀道難」「上皇西巡南京歌、十首」「峨眉山月歌」を始めとする一連の蜀関係の作品は、土地と詩人という問題を語る上で、極めて重要な作品群と考えられるわけであるが、これまでの李白と蜀との関わりに関する議論の中では、ほとんど取り上げられなかったと言える。その理由としては、やはり蜀と言えば李白の故郷というイメージが強いがために、李白の個人的な出生や生活、あるいは思想形成といった面に関心が集中してしまったからであろう。しかし、李白における蜀地方の意義を、その一面のみに絞って見てしまうと、これら李白の代表作とも言うべき作品群との関わりを見落としてしまう恐れがある。また、これらの作品群は、すでに述べてきたように、いわば土地讃歌といった側面をもっている。李白の土地讃歌、土地愛着は、広く中国各地に及んでおり、この蜀地に限られているわけではない。むしろ、李白にとっての蜀地方は、故郷であるという以上に、「詩跡」に成り得る地の宝庫として認識されていた可能性が強い。その意味で、これらの作品群は、より巨視的な観点から、「詩跡論」「文学的風土論」の一貫として、改めて位置付けていく必要があるように思われるのである。

[注]

(1) 研文出版、一九九四年。初出は早稲田大学中国文学会編『中国文学研究』第五期、一九七九年。このほか郁賢皓著『李白叢考』(陝西人民出版社、一九八二年)所収の「李白蜀中事迹考」「李白出蜀年代考」「李白与元丹丘交游考」等も参考になる。

(2) 「詩跡」(「詩的古跡」)の定義・意義等に関しては、拙論「李白における武漢の意義～『詩的古跡』の生成をめぐって」(中国詩文研究会編『中国詩文論叢』第十一集、一九九二年)、「「李白における宣城の意義～『詩的古跡』の定着をめぐって」(同上、第十三集、一九九四年)、「李白と『詩跡』～中国詩の歌枕」(大修館書店『月刊しにか』一九九五年六月号)等を参照されたい。

(3) 注(2)を参照。

(4) 巴蜀書社、一九九〇年。

(5) 所在地に関する議論については、松浦友久編訳『李白詩選』(岩波文庫、一九九七年)「補注[14]」(P.343)に詳しい。

(6) これらの土地については、すでに注(2)所掲論文において触れたので、そちらを参照されたい。

(7) 注(2)所掲の拙論「李白と『詩跡』～中国詩の歌枕」において簡単な李白「詩跡」地図を掲載したので、そちらも参照されたい。李白関係の遺跡は広範な地域に多数存在する。

(8) 蘇軾が廬山において、どのような状況下で一連の廬山詩を制作したかについては、内山精也著「蘇軾『廬山真面目』考～『題西林寺』の表現意図をめぐって」(中国詩文研究会編『中国詩文論叢』第十五集、一九九六年)に詳細な考証がなされているので参照されたい。

(9) 「蜀道難」の制作意図や寓意性に関する諸説の異同については、松浦友久著『李白研究～抒情の構造』(三省堂、一九七六年)所収「李白楽府論考」第五節、郁賢皓・倪培翔撰「建国以来李白研究概述」第四節「関於『蜀道難』的討論」(『李白学刊』第二輯、一九八九年)に簡潔に分類整理されている。

(10) なお、李白にはこのほか「見説蚕叢路、崎嶇不易行」(「送友人入蜀」冒頭二句)といった用例もある。

(11) 中央研究院歴史語言研究所、一九八六年。

(12) 楊守敬纂疏『水経注疏』巻二七(段熙仲点校本〔江蘇古籍出版社、一九八九年〕を参照)より再引。

(13) 『河嶽英霊集』『又玄集』『唐人選唐詩残』といった唐人選詞華集に掲載されているほか、『本事詩』等の唐代詩話類にも見える。また、中唐の姚合の「送李余及第帰蜀」詩に「李白蜀道難、羞為無成帰」とある。

(14) 四川人民出版社、一九八六年。

(15) 氏には「『上皇西巡南京歌』詩旨考察」（『唐代文学論叢』第九集、一九八七年）、『李白詩四百首』（張才良主編、安徽文芸出版社、一九九四年）所収の「上皇西巡南京歌」解説、『李白大辞典』（郁賢皓主編、広西教育出版社、一九九五年）所収「作品提要」の「上皇西巡南京歌」部分の提要等、一連の「上皇西巡南京歌」に関する業績がある。氏の主張する点を列挙するならば、この連作は、①形式的には「永王東巡歌」の姉妹篇で、これと同系列の作品であること、②唐朝軍の勝利を讃えた作品であること、③玄宗に対する特別な恋慕の情を抱きつつ、蜀人としての特有の心理を以って、蜀地と玄宗（国家）の命運との関連に着眼して書いた作品であること、といった点が挙げられる。特に長安奪回の勝利を祝福した作品であることを強調し、「至於詩的写法、則是処処化難為易、化沈重為軽鬆、化不幸為美事、以此来表現一種勝利後的慶幸、喜悦之情。」（『李白詩四百首』）と述べる。氏はこの詩が玄宗に対する風刺の作品であるという考えには反対で、あくまで唐朝軍の勝利と玄宗の長安帰還を慶賀したものと見做している。作詩段階における李白の心境という意味では、筆者もほぼ同意見であるが、本稿の視点から言えば、なにゆえ李白が唐朝勝利に重点を置かず、蜀地賛美に重点を置いたのかといった、土地賛美自体の持つ文学的な意義、あるいは李白という詩人の土地そのものに対する関心の強さについての踏み込んだ考察がないことが惜しまれる。

(16) 中国詩文研究会編『中国詩文論叢』第九集所収、一九九〇年。

(17) 四川人民出版社、一九八六年。また、谷鶯編『錦城詩粋』（四川人民出版社、一九八六年）も参考になる。